
算数、大嫌い！！

A.I

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

算数、大嫌い！！

【Nコード】

N1647B

【作者名】

A・I

【あらすじ】

この物語は、最初は、歩美ちゃんの算数解決から、スタートします。でも、後から、いろんなことが、分ってきて・・・成績ピンチの人が以外にいることが、分ってくるお話です。

算数、大嫌い！！（前書き）

以前、間違えて投稿した、「算数大嫌い」を、連載という形で、綺麗に修正して、出したいと思いますので、よろしく願います。

算数、大嫌い！！

これは、夏休み前の、一日前。
終業式の日だ。

通知表をもらった嫌な日である。

彼女の名前は、吉田歩美。

ここ、歩美ちゃんとこのマンションでは、お父さんが猛烈、怒鳴り声を張り上げていました。

机を「ダン！！」と叩いて、机の上には、通知表が置いてあったのです。

歩美は、ギャーギャー・・・「ゴメンなさいで・・・」泣き喚いています。

この時、少年探偵団のバッチが起動していたなんて、知りませんでした。

このことを、一番知られたくない好きな人、コナンくん知られてしまいます。

一体、何が、あったのでしょうか。

実は、彼女、他の成績は、いいんです。ある1つを除いて・・・

そう・・・彼女の通知表には、「算数 1」と書いてありました。

彼女は、算数が猛烈嫌いなんです。

しかも、教科書の一番最初から分ってないんです。

お母さんは、「まあまあ・・・１つくらい・・・」と言いますが、お父さんは、彼女の手を引っ張ります。カバンに、夏の生活や、算数の教科書やノート、公文教材などを、全部入れると、彼女を、マンシヨンの外へ追い出してしまいました。

ボタン！・・・・・・・・・・

「ウワー・・・」歩美は、ギヤーギヤー・・・・・・・・

「算数が出るようになるまで、帰って来なくて、よろしい!!」

とお父さんの怒鳴り声がしていたのでした・・・・・・・・

行くあてがなくなった、彼女は、「グスン・・・」

カバンを手にして、たどり着いたのは、米化公園でした・・・

それを、聞いていたのは。

場所が変わり、ここは、毛利探偵事務所。

猛烈暇していたコナンは、「あいつらが、普段、何をしているのか。興味あるし。探偵団バッチで聞き盗みしてみるか!」と、バッチを起動して、

聞き盗みしていたのです。それを、第1ターゲットで、聞こえてしまったのは、

歩美ちゃんでした。

コナンは、「あーあ・俺の恐れていたことが、ついに・・・」

と、頭を悩ませます。コナンは、「俺、ちょっと、歩美を迎えに行ってくるぜ!」

と、毛利探偵事務所を後にして、コナンは、スケボーで、バグューン・・・

彼女を探す為、メガネのスイッチを起動しました・・・

点滅が、どうも、米化公園に集中していたので、すぐ、場所は分りました。

ひとまず、隠れて様子を見ようと、コナンは、スケボーから降りて、抱えて、公園の大きい木の横に、隠れることにしました。

歩美ちゃんは、ベンチに座り、えらいけなげに、一生懸命やろうとしていました。

泣きながらも、ノートを開いて、教科書を開いて勉強始めたのです。しかし・・・

だんだん、分らなくなってきた、彼女は、「もうやだ!!!」

泣きながら、ついに、ぶちきれて、カバンごと、投げてしまいまし

た・・・

その鉛筆は、コロコロと、コナンのところへ、転がっていきました・・・

コナンは、メガネが光ります。

鉛筆と、ノート、散らばっていたものを、全部拾うと、彼女の前に現れました。

「おい？算数から逃げるなんて、よくねーぞ。」

コナンは、彼女の隣に座りました。

「ハッ！コナンくん！！どうして？」歩美は、どうして、コナンくんが！と血相変えて、

イスから降りだした。そして、コナンから、「返して！！！！あたしのことは、ほつといて！

1人で解決するんだから！！」

と、泣きながら、カバンを奪い取ると、逃げようとして、後ろから、手をつかまれました。

後ろでは、コナンが、真剣な顔して、何も言わず、首を振っていません。

コナンは、「いいから。そこ・・・座れ。」と、それだけ言いました。

歩美は、「だから！どうして、コナンくんが知ってるのよ！！」

と、怒り出したので、「これを忘れてないかい？」コナンは、探偵バッチを見せました。

「あっ！さては！！」歩美が取り出して、見てみたら、スイッチが起動してあったのです。

まさか………今までの全部、聞こえちゃった！？

歩美は、「教えてもらおうなんて甘いこと、思っていないわよ！

探偵バッチで全部、聞いていたなら、分るわよね！

あたし、教科書の最初っから、全然、分っていないんだよ！！計算もだよ！

今、猛烈に、恥かしい状態になってるの！！

みんなに、どうせ、バカにされるに決まってるんだから！！あなたも、そうに決まってる！

何回、同じとこやってても、覚えられない私に、教えてくれたって、無駄なんだからね！！

だから、算数は、人生の中で、一生やらないんだから！！
あたしのことは、ほっというて！！」

と、泣きながら、激しく怒鳴りました・・・

コナンは、ここで、一発、怒鳴りました・・・

「算数から逃げるな！！」と・・・

歩美は、「！！」怒鳴られて、さすがに、しゅるんと静かになりました。

ベンチで、腰掛けている2人。

コナンは、優しく、彼女の両手を取ると、真剣に話しました。

「なあ、歩美ちゃん。

嫌いな気持ちは分るけど。

算数だけじゃない。苦手な教科が！

がんばろうよ！俺が、面倒見るから。

アガサ博士の家で、合宿しようぜ！

今度のテストで、いい点数を取って、両親を見返そう！

歩美ちゃんならやれるよ！

それに、俺は、前のとこが分ってないからって、バカにしねー・・・
それをすればな！探偵失格なんだぜ。探偵は、人を助けるのが仕事
だろ？

いいか？いくら頭が良くて優秀でもな。心が狭い奴は、探偵にはな
れねーってことさ。

バカにする奴らこそ、最低で、心が狭いつて俺、言っただろ？
いくら優秀でも心が狭かったらさ。そういうことなんだぜ！

算数のことは、俺に相談しろ。俺はね。人に教えて、迷惑なんて、
思ったことは、

全然ねーんだ。むしろ、分らなくても努力してがんばっている・・
ことに大きい意味があるんだってことを、覚えておきな。努力して
いる子には、味方がいるってことを、
覚えておきな。だから・・・算数を人生、捨てるなんて、自分を失
っちゃダメだよ！
これだけ、俺と約束しろ。」

コナンは、優しく、言いました。

「バカに・・しない？
最初から分ってなくても、バカにしない？」

歩美は、グズリながら、言いました。

「うん！むしろ、助けたいと俺は思ってる。」コナンは笑顔で言
いました。

「なら・・・あたし、もう一度、がんばってみる！」

歩美は、やる気を出してくれた。

コナンは、「大丈夫！がんばろうな！」

と、笑顔で両手取りながら言うと、スケボーを、取り出してきた。

後ろに彼女を乗せて、アガサ邸に、移動しました・・・

算数、大嫌い！！（後書き）

次は、アガサ邸にて、話は進みます。

プロローグ（前書き）

分らなくなっちゃった、彼女は、逆切れする、一面を持っています。それに、対して驚くコナン・・・
必見です。

プロローグ

アガサ邸にて：

ここにやってきた、コナンと歩美。

歩美は、博士と哀の前で、グスン、グスンしていました。

博士は、ノートをまず、開いてみました。

すると、「これは、ひどいのう・・・ノートの中身が、算数の計算問題所か、

プリキュアや、セーラームーンの絵で、埋め尽くされておるわい・

・
これでは、いかんぞ・・・」と、驚いてしまっていました。

つまり、歩美ちゃんの、算数のノートは、見事に、

イラスト・落書きノートになっていました。

哀は、コナンから、話を聞いて、「あら・・・それはいけないわ。

算数ってね、大切よ。一応、学校つてとこへ、通っている間は、イヤでも最後まで、がんばりましょうね。あなたなら、大丈夫よ。あ

なたには、最大の家庭教師がつくんだから。

しっかりね。」と、笑顔で言いました。

コナンは、「今日は、こんなに、グズってたらさ。無理だから。

パーツと遊ぼう！そして、明日からスッキリして、気持ちを入れ替えて、新たに開始しような！」

コナンは、ちょっと、今の歩美の様子を見ると、クシヤクシヤ

してるから、心を落ち着かせた方がいいなと感じたんだ。

こうして、この日は、テレビ見たり、ゲームしたりして、遊んで、博士の家で、寝ました・・・

コナンは、寝る前に、蘭に携帯電話で、連絡しておきました。戻れそうにないということ・・・博士んここにやっかいになると・・・

「そんなに・・・ひどいの・・・算数・・・いいよ。しばらく、泊まってさ。ちゃんと、面倒、見てあげなさいよ！」

蘭は、それだけ言うと、電話を切りました。

さて、向こうの、毛利探偵事務所では。

小五郎が、「算数が分らんだ」。
そりゃ、いかな。

小学生のうちは、いかなぞ。しっかり、せにや・・・俺達、大人は、終わったから、えーけどな！ギャーハハハ！

まあ、あいつなら・・・任せてもいいだろう！

さー、俺は、沖野ヨーコちゃんの番組見ようっ！あー！ヨーコちゃんん♪

ヒューヒュー♪もう、最高♪ 僕ちゃん、愛してる♪」

と、テレビ見ながら、まーた、テレ笑いしていました。

テレビごと、抱えてしまって、キスする、始末で、困ったものであ

る。

「もう、お父さんだったら！そんなことだから、お母さんにも、逃がられちゃうのよー!」

蘭は、それだけ言うとお休みして、寝てしまいました・・・

こうして、次の日の、朝を迎えました・・・・・・・・・・

次の日から、アガサ邸では。

早速、歩美ちゃんは、落ち着きを取り戻して、勉強を始めました。

コナンは、まず、光彦にも、事情を説明。元太にも、来てもらいました。

探偵団、バッチで、急遽、全員集合を、呼びかけたのでした・・・

歩美ちゃんは、のめりこみが、早い。

計算はマスターすることが出来ました。何がいけないのか。

応用問題が、特に、大問題だった。

応用問題になると、特に彼女は、逆切れする、意外な一面を、コナンは、初めて目にした。

元太は、「あちゃー・・・すげー・・・」と、啞然している。

「うわー・・・コナンくん、大変だ。」光彦は、見てみないフリしましょうと、いい、元太と一緒に、別の部屋で、ゲームして遊んでいました・・・ポケモン交換始めちゃった・・・

その一方・・・・・・・・・・隣の部屋では。

「もうやだ!!」歩美は、泣きながら、教科書、ノート、鉛筆はもちろんのこと、

花瓶や、テレビゲームのカセットまで、コナンに投げつけてきた。

「まったく!少しは落ちつけ!!」

コナンは、防御したり、よけたりで・・・アガサ邸は、大騒ぎだ。アガサ邸の窓が開いていたので、歩美ちゃんが投げた物は、すべて外へ・・・・

それを通る近所の人達が、「ありやま・・・」と、ちらばっていた、すごい物を見て、見て見ぬフリをして、通りすぎていった。

様子を見ていた、博士と哀は、驚いた反面密かなおもしろ半分で、様子を見ている。

「おもしろそう!あたし、蘭さんや、小五郎さんに、教えてあげようっと。」

メッタに見られないわよ!

歩美ちゃん!応用問題、よく文章、読むのよ!分らないからって、逆切れしちゃうダメ!

これ以上、江戸川くんを怒らせたらダメよ・・・あっ!また、投げた・・・江戸川くんが、防御したわ。わ・・・哀は、ハラハラしながら、見て、言いました。

「こりゃあかん。ワシらは、ひとまず、退散しよう!」

元太くん!光彦くん!あの2人だけ、残しておいて、ワシらは、

毛利探偵事務所へ行くぞー！」と、声をかけました。「おうー！」
2人は、一緒に行くことに。

そして、2人だけを、残して、驚いちゃった哀と、博士は、みんな
を連れて、いったん、毛利探偵事務所へと行きました・・・

プロローグ（後書き）

次回は、毛利探偵事務所で、爆笑が飛び交います。

第1章（前書き）

毛利探偵事務所では、笑い話が飛び交います。

第1章

さて、場所が変わって、毛利探偵事務所。

みんなは、「実はね・・・」って、ヒソヒソ話して、ゲラゲラ驚いて、笑っていました。

毛利小五郎も、「見てみたい！どうだ？暇だし、見つからないように、こそつと、

みんなで、除くとするか！アガサ邸行こう！」と、言い出した。

「お父さんったら！！」蘭。

園子は、後から、蘭に、CDを返しにやってきた。

イヤに盛り上がってるので、一体ぜんたい、何の話だと蘭に聞いていました。

園子は、話を聞いたとたん、おもしろがっちゃって、

「へ・・・あのメガネのガキンちょが、家庭教師ね！いいところあるじゃん♪

しかし・・・（笑い出す）どうしちゃったの！？彼女、すごいね！分らなくなると、逆切れして、物投げ攻撃する・・・あたし、見てみたいかも！

ねえ！みんな！今から、ツアーとしてさ。

アガサ博士んとこ、行かない？

あのガキンちょに、見つからないように茂みに、腰下ろしてさ。見学させてもらいましょうよ！あたし、実況中継しようっと！」

という、園子の提案で、「いよっ！話しが分るねっ！俺も実は、同じことを考えていた。」

小五郎は、笑い出す。「もう・・・やめなさいよ。そんな・・・実況中継なんて・・・」

蘭は反対したものの、実は見たいらしい。

こうして、話はうまく、まとまって、「アガサ邸出発!!」

と、みんなで、意気投合。アガサ博士の家に戻りました・・・

ここは、場所が変わり、アガサ邸。

アガサ邸にやってきました、蘭、園子、哀、光彦、元太、博士、小五郎は、集団として、

コソコソ・・・と、お庭の方にやってきました。

そして、腰を低くして、見つからないようにこそっと、窓をのぞいてみます。

すると・・・・・・・・・??

コナンの怒鳴り声、すごいことになっていました。

コナンの声が、外に丸聞こえ・・・

園子は、目の当たりにして、「おーおー！やってる、やってる！、これは、すごい、すごい！」と、望遠鏡でのぞく始末。

小五郎は、あたりを見て、ビックリする。

「なんじゃ、これは・・・??花瓶に、ノートに、教科書、鉛筆、カセットまであるぞ。」

と、笑いをこらえて、拾い集めていました・・・

さて、その窓の中で、何が起こっているのか。次回へ続く・・・

第1章（後書き）

次回から、園子の実況中継つきです。

第2章（前書き）

ついに、江戸川コナンも、逆切れか！？

第2章

コナンは、ひたすら、防御していました。

外では、園子の実況中継が始まっています。

「えー私、鈴木園子でございます。

今から、鈴木園子が、メツタに見られない、2人のあの状態を、これからです、ね、

実況生中継で、お届けしたいと思います！

今、2人は、投げ合い状態になっております。

原因は、算数を廻つての戦いから、始まってしまった模様です。喧嘩・・・ではない模様です。

あつ！ガキンちょが、防御体制だ。あつ！彼女、分らないってまた、投げた。

すごい、すごい！コナンくん、いつ、切れるのだろうか？果たして？？」

園子はこんなことを、実況中継しだしてしまった。

「もう、園子ったら！」蘭は、気にしていても、おもしろがっちゃってる。

蘭は、「ダメよ！コナンくん！切れたら、ダメだからね！！」

と、心配そうに、なりゆきを見守っていました・・・

しかし。みんなが思っていたことが、ついに起ころうとしていまし

た・・・

ついに、ブチ切れた、江戸川コナンは、「……………」

こうなったら、沈める手は、ただ1つ！
大人しくさせるしかないと思い、

「ダン！！！！」

ついに、机を、思い切り蹴飛ばしました。
机は、大きく斜めに動きました…………

歩美は、ビックリして、いったん停止しました…………

コナンは、「ハアハア…………たく！！」
女の子だから！！俺、今、机で、蹴飛ばして、はらしたけどな！
これが、相手が男だったら、殴ってるぞ！！
いい加減にしろ！！

たく…………算数のさっきのページから始めるぞ。
とつとと、俺の堪忍袋の尾が切れる前に！！
外へ行つて、投げた物を全部、とつとと、拾って来い！！！！」

コナンは、猛烈怖い顔して、怒鳴りました…………
外で見ていた人は、ビックリして、一時停止…………

「コナンくん…………ついに、切れましたね…………いつか、なるんじゃない

いかと

思いました・・・」光彦。「あーあ・・・」蘭。

「やりやがった。まっ！でも、物に当たったのは、あいつも、立派だな。」感心する小五郎。

「あいつも、大変だな・・・」元太。

「元太くん！光彦くん！こっち！こっち！歩美ちゃん出てくるわよ。あたし達、知らない人なんだから、見つかったらやばいの！隠れるのよ！！」園子が、コソツとしゃがみながら、手招きしていました・

「そうだった！わりー！わりー！」元太。

「そうでしたね！」光彦も同時。

こうして、外にやってきた彼女は、シクシクしながら、物を全部拾いました・・・

中に入り、落ち着くとコナンが、水を飲んで、落ち着いたいつものコナンに戻っていました・・・

こうして、再び特訓は開始。

応用問題でも、後もう少して完成なんだ。

「後、もう少しで、家に帰れるんじゃない！
落ち着いて、よく文章読んでごらんよ。」コナンは、優しく言いました・・・

こうして、何とか切り抜け……
応用問題が、やっと。

歩美ちゃんは、出来るようになっていったのでした……

そして。

園子達も、「ふ……終わったみたいだね！あたし達は、帰ろう！」

と言い出し、他のメンバーは見つからないように、帰りました……

そして。

一週間後。

テストで、彼女は算数は、コナンが事実思っていた点数よりも、8
0点という高得点で、
見事切り抜けました。これは、さすがに、コナンも驚いた。

しかし、また、その後で、解決したかと思えば……???
歩美は、「あっ！そうだ！」と言い出し、あたしの他にも、もう1
人、
隠れた、成績危ない人物がいるよと、その名前を、コナンに告げま
した……

コナンは・・・??

3・2・1・0!!

「あの、バーカ!!!!」

コナンは、噴火。ドーン!!

怒り爆発で、「もう!!俺に恥をかかせやがって!!少年探偵団!!全員、アガサ邸に集合せよ!!」

コナンは、探偵団バッチで、全員集合を、呼びかけました・・・

さて、その、問題児とは、一体誰なのか。
次回へ続く。

第2章（後書き）

さて、ここで、もう一人、問題児がいた！！
その人物とは、一体何か？次回へ続く。

第3章（前書き）

果たして、その人物とは？？

第3章

次の日、コナンは、急遽、少年探偵団、全員を呼び出して、アガサ博士の家で、ミーティングを始めました。

ここは、アガサ邸。

「何だよ・・・コナン・・・」元太。何を言われるのかまだ、知らない。

「もう、歩美ちゃん・・・すごい、高得点だったそうじゃないですか！

ご両親にも、認められたそうですね。おめでとう！で、無事に、解決したんでしょ？」光彦。

「どうやら、他にも、成績危ない子が、このメンバーでただ1人、いるよね・・・

まっ！あたしのことじゃないけど・・・一体、誰？

江戸川くんが、切れるなんて、相当なことよ。」哀。

「なあ、お前ら・・・

今年の夏休みの抱負を言ってみろ！」コナン。

「えっと・・・今年の夏休みの抱負としては・・・ですね、少年探偵団と、学校と塾と勉強も、しっかり、両立しよう！でしたね！」光彦。

「そう。これが、守れる所か、全教科、0点！！なんて、すげー奴がいるんだよ。

それも、うちのメンバーで。その犯人を俺が、今から、当ててやるうか??」コナン。

「犯人は！？一体、誰なんです？」光彦。「その犯人とは！？」光彦・哀・歩美は、3人して、コナンの顔を覗き込んでいる。

「その犯人とは……………」
「お前だ！！！」

コナンは、ビシッと、指で、その人物を当てた……………

そう、その人物とは……………

小嶋元太くんだった……………

「いー！？だってよ……………」元太は、勉強が嫌いらしい。

「だって、クソも、あるかー！！！！いい、団長さんが！！
全教科、オール1なんだぞ！！！」

コナンの声は、空へ、響いた……………

第3章（後書き）

小嶋元太くんと明らかに、コナンと元太くんは、次回、大喧嘩に発展します。

第4章（前書き）

見事にコナンと元太が大喧嘩に！？

第4章

小嶋元太くんは、何と、全教科サイテー点数だった。
0点！！だったのです。

コナンは、「団長が、全教科、0点でした！なんて、しんじられねーよ。」

と、言い出しました。「何だよ！コナン！ちょっとばかし、勉強出来るからっていはるんじゃないよ！一学年で、一番のトップだからって！！！」元太、立ち上がります。「ちょっと・2人共・」
歩美は、喧嘩になりそうなので、慌てて、止めに入ろうとします。

歩美は、これは、やばいかもしれないと感じたのか、博士のところに事情を知った、博士は、「まあ・ちょっと、様子見よう。危なかったら、ワシが止める。」
と、約束しました。

元太は、「お前、クソ生意気なんだよ！！団長は俺なの！！一度、こいつを殴らなかつたら、気がすまねーぜ！！」と、いきなり、コナンに飛びかかって殴りこみで、行きました。

「うわっ！」コナンは、横に倒れて、防御中・・・メガネが落ちました。

ここで、ドタン、バタン・・・
見事に、激しい、大喧嘩が始まった。

コナンは、「何だよ！俺はね！探偵団もいいけど、勉強も自立しろ

って言ってるの!!」

と、殴り返したりで、アガサ邸は、大騒ぎだ。

歩美は涙ながらに、「やめてー・・・コナンくんも、コナンくんよ！元太くん！」と、叫んでいる。

一方、光彦と哀は。

「あなたは、大丈夫そうね。

これからも、塾と、学校と探偵団両立しっかりね！」笑顔で言う哀。「ありがとうございます！」光彦は、笑顔で言いました。

2人で、仲良くお勉強・・・していました・・・

一方・・・こちらは。ドッタン、バツタン!!

コナンは、殴りかかる、元太も同時に。

「こいつ！その優秀な面を、殴ってやる！」元太は、拳で、振り落とします。

コナンは、「ふっ!!」バシッと受け止めます。そうはいくか!など・・・

コナンは、上に乗っかるわ、元太も元太で、まあ、メチャクチャ。

博士は、これはいかんと思い、ついに・・・

「いい加減にせんか！！2人共！！」

と、ゲンコツで、「ゴン！ゴン！！」

と、2人の頭を叩きました・・・

「この、バカものめ！！」

君も君じゃ！大人気ない！」博士は、叱りました。

「チェッ！俺は、悪いことしてねーじゃん！！」怒り出すコナンだった。

元太くんは、ついに、珍しく泣き出した・・・

「ウーン・・・博士」

俺、悔しい、悔しい。あいつに、バカにされた！！」

と、泣き出したのでした。

「元太くん！どうじゃ！少しは、反省したかのう・・・

そうじゃ！これから、ワシと一緒に、成績アップ目指すかのう！

がんばった、暁には、おいしい牛井と、ワシの新作テレビゲームがあるぞい！」

と、博士は、言いました。

「ゲーム」牛井「俺、がんばっちゃう」

博士！俺に、勉強を教えて下さい！」元太は、真剣に言いました。

「ったく！呆れた！

こいつは、ゲームと、食い物ばつかしだな！
そのくれー、勉強も集中しろよ！ったく・・・」コナンは、腕組んで、ふくれつつら。

「あんだよー！」元太。「やるか？」身構えるコナン。

「まあまあ・・・牛丼。テレビゲーム。」博士は、元太にそれを、けしかけました。

「うー・・・」こいつを殴りたいけど、ゲームと、牛丼が俺には待っている！！

それを考えたら、こいつを殴ることは、やめた元太でした。

そして。

「俺、もう、お前が、謝るまで、勉強教えてやらねー！

仲直りしたかったら、全教科せめて、50点以上とってみせるんだな！！！」

コナン、腕組んで怒って座っています。

「けっ！へーんだ！教えてもらわなくて、結構！！おもしれー！この勝負、受けて立つぜ！！後でほえずら、かくなよ！コナン！」元太。

そして、2人は、立ち上がると、お互い顔つけて・・・

怒りのオーラをそれぞれ、お互い、発揮した・・・

「ビビビのびー」コナン。「プププのプー」元太。

そして。

2人揃って………「フンッ!!」

こうして、元太と博士は、2人で、地下室で、お勉強を開始したの
でした……

行く前。またしても嵐が。

「さーて、歩美ちゃん♪
あんな、バーカは、ほっというて、僕達は、仲良くおやつでも、食べ
ようか♪」

とここで、彼女の手を取った。
みように、彼女に優しくするコナン。元太に見せつけ。

元太は、「あー!
こいつ!!!俺の歩美を、よくも、人質に〜!!」と、おのれと
怒りの炎。

「人質なんて、人聞き悪いな……元太くん♪
彼女は、悪いけど、僕がいただくよ。悔しかったら、挽回するんだ
ね!」

コナンは、意地悪っぽく、アツカンベーすると、歩美を連れて、行
こうとしました。

元太は、「お・の・れ〜コ・ナ・ン〜団長を怒らせたこと、後悔するなよ！」

今度のテスト・・・全教科、80点以上、とってやる・・・あいつめ・・・

「やいやいやい！コナン！！」

と、指差して、叫びました。

「何だよ、まだ、何かあんのか？おバカ団長さん。

話は、聞いてますよーだ。

むーりむり。元太に、80点以上なんて・・・ヒヤヒヤヒヤ。

よーし。じゃあ、こうしよう。

もし、お前が、80点以上取れて、俺を見事に、驚かせたら、

俺、その場に土下座して誤ってやるよ。それで、仲直りしてやる！

まっ！一生かかって、無理だらうけどな！まっ！せいぜい、がんばれや！」

笑い出す、コナン。

「く〜！！」元太は、殴りかかろうとして、博士が側から、小声で、

「牛丼。ワシの新作、ゲーム。」それだけ言々と元太は、喧嘩が、

収まった。こうして、博士と、元太くんは、地下室で、勉強会が始まりました・・・

果たして、元太くんは、全教科、80点取れるのか???

また、コナンはコナンで、また、最大の嵐が吹く前兆・・・なのか。
何が起るのか。次回へ続く。

第4章（後書き）

元太くんは、果たして、全教科、80点以上取れるのだろうか？次回へ続く。

第5章（前書き）

元太くんは、猛烈に変わることができるのか？

第5章

地下室の中で、博士と、元太は、仲良く勉強していました。
数日後のお話。

博士は、採点し、「一度・・・コナンくんを見返した方がええじゃろう！」

まあ、大体、ここまでくれば、抜群に良くなっただんじゃが・・・
ここまでにしておくかのう！」と、心配して言いました。

「いや！あいつにだけは、他のことじゃねーの。」

勉強だけ、ゆるさねー！あいつばっか100点満点つてのもな！
だで、ぜってー！負けねー！！」

元太くん、今回は、珍しく、頭に鉢巻までつけて、「江戸川コナン
打倒！！」

を、目指して、全教科、何と、100点を目指して、勉強し始めました。

歩美は、コソツと、除いていて、後でコナンに知らせにきました。
怯えている歩美。「アワワ・・・元太くんったら、全教科、100点
目指してやるゝなんて、言ってるわよ！嵐でも来るんじゃないかし
ら？」と。「ハハハ！無理無理。」コナン、この時は、あいつに限
って無理だろうとさすがに思っていました・・・

本当のまさかとは思わなかったからである。

そして・・・ついに、一カ月後。

それは・・・江戸川コナンを見事に、驚かす結果となった・・・

「イツヒヒヒ！どーだ！コナン！！

全教科、満点に切り替わったぞ！！

まいったかー！！」と、歌舞伎のようにかっこつける元太くん。

「はー！！おそれいましたー！！団長様ー！大バカ団長なんて言っで、すいませんでしたー！↑けっ！油断したぜ！（工藤新一としての気持ち）」

土下座して、時代劇風に、誤るコナンだった・・・

「あっ！分ればよろしいー！！」元太がかっこつけるので・・・歩美が、笑いながら、どこから持ってきたのか、歌舞伎の舞台袖で最後に使う、木の棒2つ構えて、「いよー！カンカン！これにて、一件落着ー！」と、笑いながら、光彦も一緒になって、挑発していました・・・コナンと元太くん、握手をして、無事に仲直りしましたが・・・？？

しかし。これだけでは、終わらなかったのです。

それは、事件解決してから、2日後。

アガサ邸で、1本の電話が入って来ました。

「おーい！コナンくん！電話じゃぞーい！

蘭君からじゃ！何か、すごい気配で、怒鳴っておるぞ！」

と、博士は、受話器を渡しました。

「蘭姉ちゃん？？僕、何か悪いことしたかな・・・」腕組んで首かしげている、コナンの耳元で、蘭からの、キンキン声が、頭に入ってきた・・・・・・・・・・

「ちょっと！コナンくん！人のこと言えるの！？」

あたしね、今日、懇談会行って来たのよ。

小林先生から、「音楽の教科書の最初から分ってない！歌もひどいし。」って、あたし、叱られたじゃないの！ドリルも提出してないんですって！？

今から、全部やりなさい！！

でないといくら、他の教科が満点で優秀でも、落第になっちゃうわよって、先生が言ってるわよ！！今度、夏休み明けまでに、先生の話しで、名誉挽回の機会を与えて下さってるの。

あなたは、優秀だからこそ、これで、助かる確率が高いのよ！！
いい！！？しっかり音楽やりなさいよ！！

夏休み明けまでに、何か2曲、得意な何でもいいそうです。曲はね！みんなの前で、しっかり歌えるようにすること！！これが、課題だって、あたし、言われてきたんだからね！しっかりやりなさいよ！音楽が、オール1で、お見事なんだからね！！
あんたも、落第者よ！！！！」

と、それだけ言うと、ガチャン！と、電話を切りました・・・・・・

みんなは、それぞれ、顔を見あわせて、「ズテーン！！」
思い切り、ずっこけた・・・・・・・・・・

コナンは、白く固まっている。

「俺が・・・この俺が、だかが、音楽の為に、落第・・・!?」で・

「だ・・・大丈夫だよ！音楽なら、あたしがやれるし！

今度の試験で歌が受ければ、落第は停止になるんでしょ？

なら！がんばろう！ま・さ・か・あたしに算数やれってあれだけ
言っておいて、

あなたが、音楽から、逃げる・・・なんてことはないわよね
お互い様で、いいじゃない？」と笑いながら、言う歩美。

「コーナーン」

お前、俺に何て言った

そういうテーマが一番、落第者になっちゃったじゃねーかよ！

バチが当たったんだぜ！ギャーハハハ！いい気味！！

こいつ、あまりに頭良すぎるもんだから、1つくらい、苦手なものがあつたつて、いいんじゃないかと思つたんだ！俺・・・おもしろ
くなってきたぜ！

そうだったな！思い出したぜ！こいつは、カラオケで、十分俺いじめれるな！

覚悟しろよーコナン！」

ニタニタ笑い出した、元太くんだった・・・

「元太くん！」歩美。「うるせーよ！」元太。

「そうだ！やっと、歩美ちゃんも解決して、後はどういうわけか、
コナンくんだけになっちゃったんです。

どうです？勉強会終了つてことで、ここは1つ、カラオケ大会で盛り上がりませんか？

コナンくんを、助けてあげましょう！

音痴を改善する、いいチャンスですよ！」光彦は1つ提案した・・・

「光彦・・・お前・・・」コナンは、涙ウルウル。

「僕は、味方ですからね。」光彦ニコニコ。

「あたしもだよ！あたしがいることお忘れなく！」歩美。

「あたしも手を貸してあげるわ。」哀。

「お前ら・・・感謝するぜ・・・」コナンは、他の3人に囲まれてホツとしていたんだ。

しかし。カラオケで、コナンは、猛烈ないじめを受ける羽目になるとは、誰も思っていなかった。

アガサ博士は、電話で、蘭、園子、小五郎、目暮れ警部、佐藤刑事、高木刑事を呼び出しました。みんな、夕方頃、アガサ邸に集合してそこから、カラオケレッツゴーになるんですね。

集まり場となりました。

「え！？あの、コナンくんが、音痴克服！？おもしろそうだ！」と、警察の人達は、おもしろがって、参加することに。

小五郎は、コナンの頭をなでると、「イヒヒヒ・・・こいつは、音痴だからな・・・

こいつに、氷川きよしでも、歌わせてみるか。おもしろいことになりそうだけ！」

と、小五郎は、爆笑していたのでした・・・・・・・・・・

「けっ！クソ、おもしろくねー・・・」

コナンは、この日から、グレていました・・・機嫌が悪い・・・

そして、次の日。学校もお休みだし、暇だからということで、博士が、大部屋とつてくれた。

カラオケシダックスで・・・

朝から晩まで歌い放題の形を今回大きくかって出てくれたのでした・・・

この日は、特にコナンにとって、最大の地獄と化すのだった・・・

次回へ続く。

第5章（後書き）

次回から、カラオケシダックスへ、場所が移動します。そこで、コナンを待っていたものは・・・???

第6章（前書き）

コナンは果たして、どうやって、音痴を克服するのか？

第6章

こうして、次の日は、カラオケ大会となりました。
一番おもしろくない人は、コナンだ。

蘭は、ありとあらゆる曲を入れてみました。

マツケンサンバから、とっとこハム太郎から、プリキュアから、セーラムーンなど・・・

クレヨンシンちゃんとか。主題歌を入れて、コナンに一度、全部、歌わせてみます。

ところが・・・・・・・・・・

「ボゲーボゲーボゲー・・・」

とんでもない音痴なんだ。

歩美は、おもしろがって、「じゃあ・・・次は、きらりんレボリューション行ってみよう！その後は、ピチピチピッチね！」

と、入れてしまう。「おい・・・あんな、恥かしい歌入れるな・・・知ってるけど・・・」

と、コナンは、振り付けも実はしっかり覚えていて、歌いだした。

ここで、全員の評価。

「ダンスは、いいのにねー。一体、どうしたら、こんなひどい歌い方になる???」

と、警察の方々は、驚いています。

目暮れ警部が、「ちよつと失礼。ワシ・・・気持ち悪くなってきた・
・
ワシは、カラオケはできんでいいから・・・コナンくんは音痴を、
治しなさい・・・」

それだけ言い渡すと、警部は高木刑事に連れられて、トイレへ。

男子トイレで、目暮れ警部は、「オエー・・・」と、吐いていた・

・

「そういう自分だって、本当は、コナンくんに負けなくらい、音痴なんですよ！」

と、佐藤刑事とトイレの外で、ゴニョゴニョ話していました・・・

・

元太は、聞いていて、「このーへたくそ!!」

お前・・・ダメだ。俺達と一緒に歌えねーんだもん!

マツケンサンバだってよ、あれ、グループでやるから楽しいんだけどよ!

うちは少年探偵団としては、マツケンサンバのコンクールは無理だぜ!

やりたかったんだけどな・・・早く音痴治せ!バーカー!」

と、意地悪してくるばかりだ。

「元太くん!やめなさいよ!あたしたちが、今度は、仮面ヤイバー歌うから!」

と、流れてきたので、コナンを除くメンバーは、歌いだした。

後で、歩美が、「2番が来たら、入っておいで・・・」と、コナンを手招き。

コナンが入ると・・・・・・・・・・？一気にヒックリ返った・・・・・・・・

「こいつダメ！」元太は、猛烈意地悪をしてきた・・・

コナンは、歌っていたんだけど、疲れてきて、「ちょっと、タイム！」

と、歩美ちゃんの隣に腰を下ろすと、お茶を一気に飲み干した。その間は、蘭や、園子が、歌っていた・・・・・・・・

小五郎は、「後、氷川きよしだけ、歌ってくれ・・・
そしたら、外で一度休憩してこい！」と、言いました・・・

「えー！？」コナンは、おいおい・・・

そう、歌わされたのは、ズンドコ節と、音次郎と、半次郎・・・とかメンイの歌を歌わされた。しかし。

「ボゲーボゲーボゲー♪」ずん・・・ずんずん・・・

と、流れてるだけで、音痴がひどい。

小五郎は、笑いを必死でこらえていました・・・

コナンは、ダンダン、みじめな気持ちになってしまい、「僕・・・外の空気を吸ってくる。」

と、立ち上がると、外へ出ました・・・・・・・・

気になって、心配した、歩美ちゃんは、外へ一緒について行きました

た・・・

歩美はそこで、江戸川コナンの、見たこともない、姿を目撃する
ことになる・・・

第6章（後書き）

江戸川コナンは、音痴だけは、どうしても、克服できない。それに、
思いつめた彼は・・・
次回へ続く・・・

第7章（前書き）

なかなか、音痴を克服出来ないコナン。
一体どうするのか？

第7章

コナンと歩美ちゃんは、外の、カラオケボックスの、横においてある、長いイスに腰掛けました。コナンは、自動販売機で、ジュースを買ってきました。

彼女に、「何も君まで来ることないんだよ。これ・・・おごり。助けてくれたからね。」

コナンは、一度、お礼におごってやつてもいいなと思ったんだ。こんなに苦しい思いをしたのは、事件を解決することよりも、もっと、苦しいからだ。

コナンは、「フ・・・」一気にジュースを飲み干すと、肩を落とした・・・

歩美は猛烈に心配した。カラオケに来てから、コナンくんの様子が変わなんだもん・・・

「コナンくん？大丈夫？もしかして、辛いの？泣きたかったらためなくていいんだよ！」と、歩美は言いました。

「いや、大丈夫。僕は大丈夫だから・・・

あれ・・・？何だろう・・・涙がとまらないや・・・」

コナンは、後ろ向いて、涙を必死に隠そうとしています。音痴というものは、人生の中で、すごく苦しいものなんだ。

「コナンくん！誰もいないし、思い切り泣いた方がいいよ。」歩美

は、心配して言いました。

何もかっこつけることないと、言い出して……

コナンは、「……」誰もいないのを確認すると、「ごめん……
歩美ちゃん……

ごめんね……」と、突然、歩美の胸元に、顔をうずめた。

「ウワン!!」

コナンは、歩美に顔を伏せて、思い切り泣き出しました……

しばらくして、落ち着きを取り戻したコナン。

「俺、音楽だけ……マジ、もう、あきらめようかな……」と、
言い出したんだ。

歩美は、ここで、1つあることを考えていた……
思い切って、提案しよう! 歩美は、話しだした。

「まだ……取り戻せるかもしれないよ!

あのね。あたしさ、ヤマハ音楽教室の、グループレッスンで、受けてるんだけど、

コナンくんさ、そこへ通ったらどうか? あたしの紹介ってことで……

一緒に行かない? ここで、治しちゃおうよ!!

先生なら……何か、改善する方法を知ってるかもしれないよ!」

歩美は、笑顔で、言いました……

「あー！ー！ー！ヤマハ音楽教室！ー！ー！ー！」

コナンは、涙を拭くと立ち上がると笑顔になりました。

「そうか！その先生なら！治してくれるかも！
ありがとう！歩美ちゃん！本当にありがとう！」

コナンは、よし！今年で、音痴は、おさらばするぜ！！

と、意気込むと、再び、カラオケボックスへ戻りました。

カラオケ室の中で、歩美は、コナンくんが、史上初で、ヤマハ音楽教室に通うかもしれないことを、みんなに、話しました。

「あーあーあー！あたし、行っただよ！なーつかしい！」園子はおそこならと、目を輝かせた。

「うん！いいかもしれないな！よし！俺が、ポケットマネーで、レッスン代、出してやる！」

こいつの音痴はひどいからな・・・これで治せば上等ってもんだ！がんばって行ってこい！！」笑顔で言う小五郎。

「ほう・・・そこなら、治せるかもしれん。

ワシは年だし、ヤマハ音楽教室なんて、通う年ではないよ。年代で、残念じゃが。

ワシも、実はのう！コナンくんと同様、音痴じゃが・・・

ワシの場合は、年じゃから、カラオケはもう、せんことに決めただね。

コナンくん！君は、せっかくの名探偵だ。
ワシが、応援しようじゃないか！！

コナンくん、君は、音痴は、子供のうちに、治した方がいい。
今のうちじゃ。将来、大人になって、音痴は、本当に・・・辛いものになるからのう！

よし！しっかり、ヤマハ音楽教室で、勉強してこい！！」

と、両手で、コナンの肩を軽く叩きました。目暮れ警部はワシのように音痴で終わってはいかんぞと、笑顔で話して、コナンに託したのです。

「僕・・・がんばってみるね！！」

コナンは、みんなに、笑顔で言いました。

「歩美ちゃん、ヤマハ音楽教室の紹介ありがとね！」蘭はお礼を言いました。

こうして、3日後。

コナンは、人生、産まれて始めて、歩美ちゃんに連れられて、「ヤマハ音楽教室」へ、
訪れました・・・そこでも、コナンは、とんでもない、恥をかくことになる・・・

第7章（後書き）

なかなか、音痴を克服出来ないコナンに、ヤマハ音楽教室に通うように進められた。これで、解決になるのか？

最終回（前書き）

ヤマハ音楽教室で、コナンは、意外にも、苦勞をしいられることになりました。

最終回

ここは、場所が変わって、ヤマハ音楽教室。

ここでは、小学生のグループレッスンやっていました。

歩美ちゃんは、先生に、「先生！この子なんだけど！

歌がとにかく、メチャクチャ音痴なの！一度、見て下さい！」と、コナンを紹介しました。

「えー、君のお名前は？」ヤマハのシステム講師の先生。

「僕、江戸川コナンです！」コナン自己紹介しました。

「じゃあ、楽しくやりましょうね！じゃあ・・・

この歌、知ってるかな？「海は広いな、大きいな・・・」の歌があるでしょ？

これでいいから。一度、歌ってみようか！」と、先生は、笑顔で優しく言いました。

ここで、先生のピアノが入ります。

「さん、はいっ！」先生は、伴奏を弾きだしました。

しかーし・・・・・・・・・・

「ボゲーボゲーボゲーボゲー」

（海は広いな大きいな♪を歌っているつもりになって、真剣だ。猛烈音程外して歌っているコナン。楽譜を見て・・・分っていない。）

「

後ろで見ていたお母さん達は、あまりのひどさにビックリしている。小さい生徒さんは、「この子、下手クソだよ!」と、笑われてしまい、ここでも、辛いハメを受けるコナン。

「ストップ! ちょっと、待った、待った!」先生は、笑いながら、ピアノを止めました。

歩美ちゃんに、真実を、話したことは、この子は、グループプレスンでは、ダメだから、次回から、個人レッスンに転校させなさい・・・ということを、話します。

「俺、音痴、もう、一生、産まれついちゃって、治せないのかな?」コナンは、ガックシ肩を落としているところへ、あるバンド練習をする為に、様子を見に来ていた、大野バンドさんメンバーが、ヤマハ音楽教室の一室を借りて、ドラムとか、曲を、練習していたのです。

そのの、男の先生が、笑いながら、「いや・・・実に、おもしろものを聞かせてもらったよ。」と、「こりゃ、ひどいな。久しぶりに見たな。」とコナンの頭を撫でて、笑ってましたが、真剣な顔して、「大丈夫だよ。来週から、個人レッスンに変わろうか。僕が、指導してあげるよ! 特別にね! 任せておきなさい!」君の場合ね。一対一で、やらないと、グループでは、大恥かいてしまうからね・・・コースを変えなさい。君は。」

と、その時の先生が、何と、あのまさかの、有名な大野バンドの、リーダーだったのです!!

そのことを知らないコナン。

有名な先生とは、つゆ知らず・・・とりあえず、コースをコナンは変更しました・・・

歩美は、「あたしとどうやら、コースは意外にも、違っちゃったみたいだね！

だって、これ見ると、ポップスを歌おう！コースなんだもん。個人でさ。

がんばってね！1人になっちゃうけど・・・クラスが、バラバラになっちゃったね・・・」

と、残念がってました。

「仕方ないよ。そんだけ、僕は、ひどいんだ。

ここで、治してみせる！！」コナンは、今年こそ、克服するぞと意気込んでいました・・・

こうして、コナンは、来週から、個人レッスンへと切り替わります・・・

個人レッスンで、始めの頃、大野先生は、あまりにこりや、ひどすぎるなということで、

幼稚のテキストから本当は、コナンくんの場合は、やった方がいいと主張した。

基礎ができてないから、楽しくないし、苦しいんだよと話して、辛いかもしれんがと、

仕方ないと、特別に手渡されたのは、幼稚園の子がよく使う、「プライマリーシリーズ」これを、徹底的に、まあ、先生が、楽しくやれるよう、教室で、アレンジしちゃって、特訓させました。

コナンは、毛利探偵事務所でも、アガサ邸でも、ヤマハのCDを、聞いて、よく歩美ちゃんと一緒に歌っていました。「懐かしい・・・やったね・・・」哀は、うわっ！全然、変わってないと、目を輝かせたりしています。博士は、「意外な結果じゃったのう！相当じゃ！がんばって、音痴治すんじゃないぞ！」と、言いました・・・

これにより、コナンは、意外にも、音楽の楽しさを実感していくようになっていました。

音痴の音階がやっと、歌えるようになってきたコナン。目が輝いていてとても、楽しそうです。

そして、一週間後。

大野先生から、コナンは、「僕が作った名曲があるんだけどね・・・夏休み明けのテストはこれを持って行きなさい。

これを、バッチリ練習して、みんなを、アッ！と言わせような。」

と、楽譜を2枚、手渡されました。

それは、「ぼくがいる」コナンのテーマ」「思い出たち」(CD江戸川コナンが歌っている奴が、本当に発売されています。)

先生が、「がんばれば、ここまで治せるという証明付きだな。

「君は・・・初、CDデビューしようか！」と、笑顔で言いました。

「えー！？俺が、まさかのCDデビュー！？ウソだろ！？」

この時は、コナンは、思っていました。

授業を受けていくうちに、コナンは目を輝かせ、感動してしまします。

「この先生は、大物だ・・・俺の、一生生きていて、苦になってい

た、音痴を見事に、救ってくれた、恩師だ。」と。

こうして、コナンは、バッチリ歌えるようになって、試験も見事合格を果たしました。

コナンは、落第せずに、すんだのです。

コナンは、「俺・・・ヤマハ音楽教室だけは、マジ、真剣に、通おうかな!!」

と、これからもよろしくお願いします!と、今年から、江戸川コナンは、音楽教室へ、1つ、新しく、通うことになったのでした・・・

そして・・・今年、コナンくんは、カラオケをすこし、克服したのでした・・・

毛利探偵事務所では。

「歩美ちゃん!君には、何て、お礼を言ったらいいかわからない!ありがとう!俺・・・音痴だけは、本当に深刻に悩んでたんだ。」

と、隠れで、工藤新一としても、うれし涙をこぼすのでした・・・

これにて、江戸川コナンは、音痴を見事、克服し、歌えるキャラクターへと、
変更されることでしょう!!アニメの中でも、俺だけが歌えなかった!!

ドラえもんだつて歌えるくせにと、コナンはそこまで、陥つて悩んでいたので。

来年あたりには、コナン・・・キャラクターソングが出せれるくらいになればいいですね・・・

大野先生は、「あの子は・・・来年あたりから、キャラソング仲間入り果たしてやってもいいね・・・」と、プロデューサーの人と話していたのでした・・・

こうして、事件は解決を迎えたのでした・・・

（終わり）

最終回（後書き）

この名探偵コナンの音楽制作しているのは、大野バンドさん。大野バンドさんのメンバーから、話を出してみました。楽しんで読んで下さい。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1647b/>

算数、大嫌い！！

2011年10月3日17時00分発行